

実践が希望をつくる

上 廣 哲 治

今年の梅雨は長雨で各地に大きな被害をもたらしました。

特に熊本、鹿児島、大分の三県は記録的な豪雨に襲われました。なかでも熊本県では、日本三大急流の一つといわれる球磨川が氾濫。鉄橋が流され家屋が水没し、多数の方が亡くなりました。このとき九州に降った雨量は、一昨年の西日本豪雨のそれに匹敵するものでした。「数十年に一度」といわれる自然災害が、いまや頻繁に起こるようになったのです。

今回の熊本豪雨について、筑波大学で気象学を研究している釜江陽一助教は、日本の上空に大量の水蒸気が流れ込む「大気の流れ」と呼ばれる現象が発生したためだと解析しました。

気象庁が提供する水蒸気量や風向などのデータを分析すると、西日本から東日本の上空一五〇〇メートルに、長さ約三〇〇キロ、幅六〇〇キロ、厚さ三キロの大気の流れが延びていたということです。日本列島全体をすっぽり覆う大きさです。

大気の流れが含んでいた水蒸気量を水に換算し、その流量を計算すると、日本最大の流量を誇る信濃川の年平均流量の約八〇〇倍に相当するといわれます。私たちが見上げる空に、信濃川の八〇〇倍の水量をもつ川幅六〇〇キロもの川が流れていて、その水が雨となって注ぎ込まれたのですからたまったものではありません。

日本だけではありません。いま世界各地で大きな自然災害が起きています。明らかに地球温暖化による気候変動をもたらしたものです。人間が豊かで便利な生活を追い求めて、化石燃料を燃やしてエネルギーにし、大量の温室効果ガスを出す、それが大気中に増えることで気温が上昇したためです。

国連は、一九九八年からの二〇年間で、世界の洪水被災者は二十億人に達したと発表しました。温暖化の影響で懸念されるのは豪雨や台風だけではありません。感染症の発生・拡大、熱中症の増加、海洋生態系の変化による漁獲量の減少もあります。すべて自然をないがしろにして豊かな生活を追い求めた人間がもたらしたものです。

今回の新型コロナウイルスのパンデミックも、その責任の大半は人間にあるといわれます。

ホモサピエンスが誕生したのは約二〇万年前。そのほるか昔からウイルスは地球の片隅で蝙蝠などの動物と共生して静かに暮らしていました。ところが、密林の奥深くまで分け入った人間が、動物と共生していたウイルスを解き放ってしまったということです。

この先、いつ、どこでどのような災害が起こるか、わかりません。こうした何が起こるかかわらない、先の見えない時代を生き抜く力となるものこそが「実践力」です。非常事態に陥ったとき、何をすべきか、どうしたらいいのか悩み迷う暇があったら、まず、できることをする。できることをしているうちに、何をするべきか、どうしたらいいのか徐々に明らかになってくるはず。そうした実践力

こそが「生きる力」となり、希望を生みだす力ともなるのです。

豪雨の被害を報じるテレビのニュース番組を見ていたら、被災された人々が後片付けをする姿が映し出されました。天井近くまで浸水した家から水につかた冷蔵庫やテレビ、タンスなどを外に運び出す人々。室内に流れ込んだ土砂をシャベルでひとかきひとかきすくすくしては、バケツに入れて運び出している人もいました。

これだけの災厄さいやくに遭いあ、多くのものを失ったのですから、茫然自失ぼうぜんじしつして立ちすくみ、あるいは座り込んでいてもおかしくないでしょう。

でも、被災した人々は休む暇もなく、いまできることを黙々と実行していました。私はそこに実践力を見た思いがしました。そして、四月に亡くなった作家で環境保護活動家でもあったC・W・ニコルさんが極地探検に行ったときの話を、作家の五木寛之いっきひろゆきさんに語っていたことを思い出したのです。

五木さんは、その話を著書『大河の一滴』に書きとめています。

「南極などの極地では、長いあいだテントを張って、くる日もくる日も風と雪と氷のなかで、じっと我慢して待たなければいけないときがある。そういうときに、どういうタイプの連中がいちばん辛抱づよく、最後まで自分を失わずに耐え抜けたか。ニコルさんに言わせると、それは必ずしも頑健な体をもつた、いわゆる男らしい男といわれるタイプの人ではなかったそうです。／たとえば、南極でテント生活をしていると、どうしても人間は無精になるし、そういうところでは体裁をかまう必要がないから、身だしなみなどということはほとんど考えなくてもいいわけです。にもかかわらず、なかには、きちんと朝起きると顔を洗ってひげを剃り、一応、服装をととのえて髪もなでつけ、顔をあわせると『おはよ

う』とあいさつし、物を食べるときには『いただきます』と言う人もいる。こういう社会的なマナーを身につけた人が意外にしぶとく強く、厳しい生活環境のなかで最後まで弱音を吐かなかった」

過酷な状況にあっても礼節を守り、いまなすべきことをきちんと実行する。基本的なことを黙々と実行する人こそが「強く」「しぶとく弱音を吐かなかった」というのです。五木さんは、「それも新しいサイクルサイクル（生き延びる）の方法」だ、と感想を記しています。

災害現場を報じた別のテレビ番組には「スーパーボランティア」といわれる尾畠春夫おはたはるおさんの姿もありました。八十歳とは思えぬ行動力で、泥をすくっては運んでいました。被害の大きい熊本県に行くつもりだったのがコロナ感染防止のため県民しか入れないと知って、大分県の天ヶ瀬温泉あまがせおんせんに駆けつけたのです。尾畠さんは、「ひとかき泥を運び出せば、ひとかき分だけ家のなかがきれいになる」と語り、手押し車に泥を山のように積んで運んでいました。

ボランティア作業にマニュアルはないといわれます。たとえわずかな作業でも、くり返しくり返し行えば、いずれは目指すところにたどり着く。尾畠さんはそれを実行していたのです。

いましなければならぬ最も基本的なことをする。するとその先に希望や目標が見えてくる。ところがあつう、希望や目標があるからこそ、そこに向かって努力できるのだといわれます。しかし、順番が逆ではないでしょうか。いまなすべきことを実践し続けていると、その先に希望や目標が徐々に見えてくる。「ひとかき泥を運び出せば、ひとかき分だけ家のなかがきれいになる」のです。実践から希望が生まれ、実践から目標がつけられていくのではないのでしょうか。

とりわけ、何が起こるかかわからない、先の見えない時代には、実践力こそが生きる力になるのです。